

建築・都市空間と余暇活動の相関に関する研究（その１５）

日大生産工（研） ○北野 幸樹
日大生産工 川岸 梅和

１．はじめに

本研究は、既報「建築・都市空間と余暇活動の相関に関する研究（その１～１４）」に引き続く一連の研究である。前稿においては、近年顕在化傾向がみられる社会性余暇活動に視座を置き、集会施設における活動状況の側面より、近隣空間における社会性余暇活動の動向と特性について検討した。本稿では、1975年、1990年、2000年の3時点の経年変化に視座を置き、近隣空間における地域居住者の活動特性について、余暇活動の量的な解析を基に活動実態の側面から検討し、異なる地域における近隣空間で行われる余暇活動の傾向的特性を明らかにすることを目的としている。

２．調査の概要

２．１ 調査対象地域

本稿における調査対象地域は既報と同様であり、大都市圏の計画供給された地域と地方小都市における各々の地域居住者の余暇活動の実態、活動特性を比較するために、異なる性格を考慮して、東京都内の計画供給された住宅団地である高島平地域、地方の都市圏に依存する小都市である島田地域の２地域を選定している。

２．２ 余暇活動調査

調査対象地域内の居住者に対し、現地において直接聞き取る方法による調査を実施した。調査期間は、1975年７月～８月（第１回調査）1990年７月～８月（第２回調査）及び2000年７月～８月（第３回調査）である。調査対象者数は、12段階（但し、1975年においては11段階）の各年齢層毎に、男性・女性、平日・休日、各々10名以上となっている。総調査対象者数は、3,639名（第１回調査：1,239名、第２回調査：1,183名、第３回調査：1,217名）であり、調査対象地域内の人口に対して1%以上を得ている。尚、調査方法の詳細は既報に示す通りである。

２．３ 余暇活動時間量の算定

余暇活動時間量の算定方法は既報と同様であり、各生活空間及び各余暇関連施設で行われる活動項目別の余暇活動について、活動の消費時間量・活動頻度より、１人１日当たりの平均消費時間量として換算し余暇活動時間量を算定している。

３．近隣空間における活動項目別余暇活動（図１）

近隣空間における総余暇活動時間量について、1975年から2000年を経年的に比較すると、男性・休日では増加しているもののそれ以外では減少傾向がみられる。男性・休日の時間量の増加が顕著に現れている要因として、高島平地域では、スポーツ、家族交流、教養・文化、飲食、団体活動の増加、島田地域では、スポーツ、ゲーム、家族交流の増加が挙げられる。

1975年、1990年、2000年に共通して、両地域において、男性女性共に余暇活動時間量の最も多い活動は、スポーツ（散歩を含む）である。平均して男性では約42%、女性では約31%を占めている。次いで多い活動は、男性ではゲーム（約13%）、女性ではショッピング（約24%）、交際（約16%）となっている。

近隣空間での総余暇活動時間量に対するスポーツ（散歩を含む）及びショッピングの時間量の占める割合をみると、1975年から2000年の経年的な変化は両地域において異なっており、高島平地域では、1975年：59.4%、1990年：52.3%、2000年：41.0%となり大きく減少している。一方、島田地域では、1975年：51.9%、1990年：53.9%、2000年：54.9%となり僅かに増加しており、上位２種の活動の占める割合の変化は、地域において異なった傾向が現れている。従って、高島平地域では島田地域と比較して、近隣空間での活動の分散化がより進行していると考えられる。

1975年から2000年の経年的な変化をみると、

女性のショッピングの減少は顕著であり、平均して約 17 分減少している。ショッピングの時間量の占める割合は都市圏において増加傾向にあり、対象空間は近隣空間から都市圏へと移行し、多様化の進行が現れてきていると言えよう。

また、1975 年から 2000 年までに、高島平地域においては、男性では、創作、教養・文化、家族交流、休息、女性では、交際、ゲームの時間量が増加する傾向がみられ、加えて、休日では男性女性共に団体活動も増加する傾向が現れている。島田地域においては、男性では、スポーツ、ショッピング、休息、女性では、創作、休息の時間量の増加傾向が現れている。従って、近隣空間での主要な余暇活動は、日常生活と直接的に密接に関係する容易に行うことのできる活動であると言え、加えて、近隣空間の担う役割は、高島平地域においてより多様化してきていると考えられる。

4．近隣空間における年齢層別余暇活動

4．1 総余暇活動時間量（図 2）

1975 年、1990 年、2000 年を経年的に比較すると、両地域共に、概して 24 歳以下では時間量の増加傾向はみられず、50 歳以上の高年齢層においては増加する傾向が現れている。

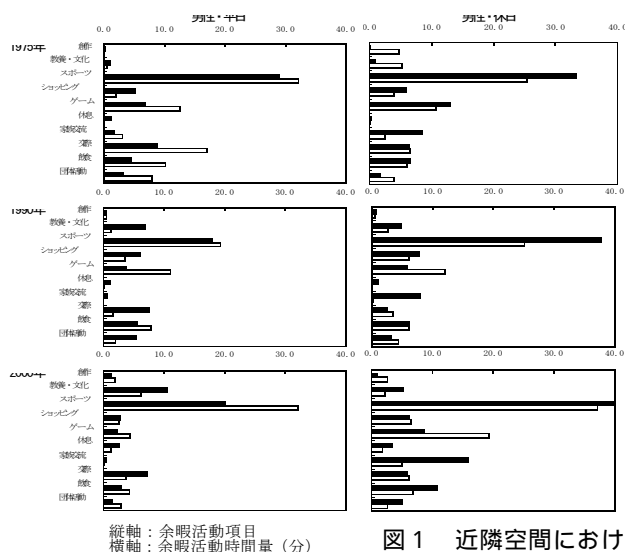


図 1 近隣空間における活動項目別余暇活動時間量

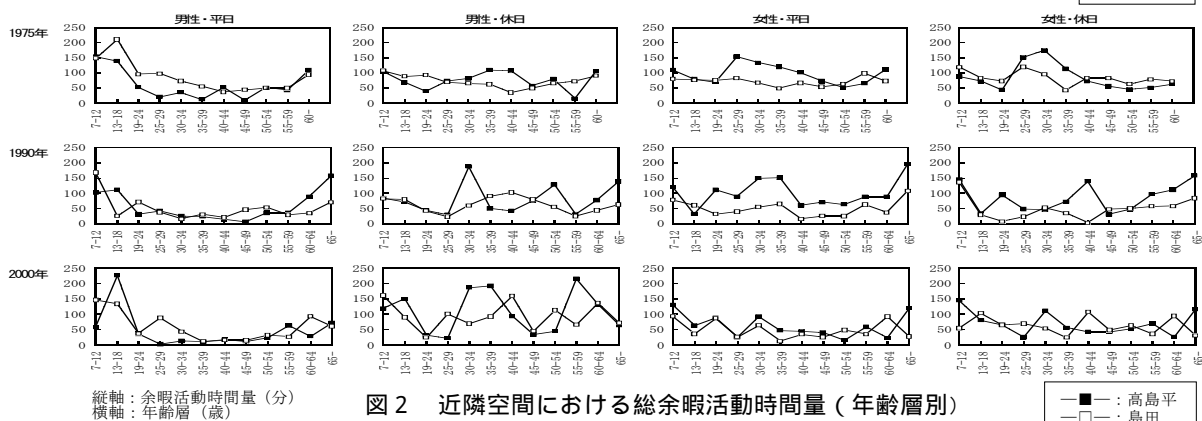


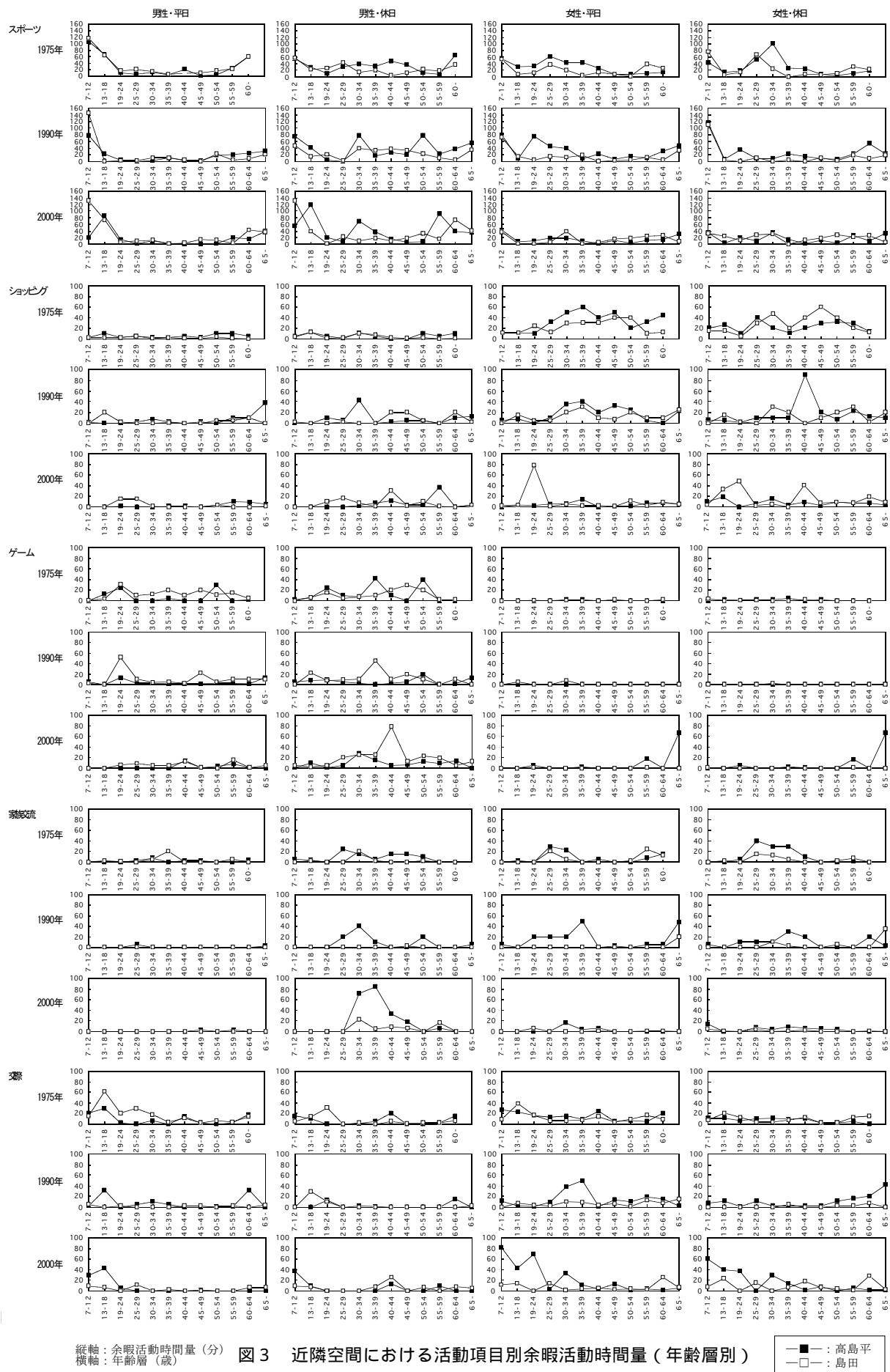
図 2 近隣空間における総余暇活動時間量（年齢層別）

男性では、概ね低年齢層、高年齢層で時間量が多くなっているが、女性では、25 歳から 44 歳の中年年齢層で多くなる傾向がみられる。その傾向は高島平地域においてより明確に現れており、加えて、女性の平日では、高島平地域の方が総体的に時間量が多くなっている。これらの傾向は、男性の中年年齢層では、両地域共に有職者が多くを占めており、女性の中年年齢層では、高島平地域において有職者の占める割合が低くなっていることに起因していると言えよう。

男性女性に共通して、平日では、年齢層別の時間量の分布パターンは両地域において同様な傾向を示しているが、休日では、分布にばらつきがみられ地域により相違が現れており、その傾向は男性において顕著にみられる。男性の休日においては、1990 年では、中年年齢層の分布パターンは地域により異なり、時間量にばらつきがみられると共に、概して中年年齢層で時間量が多くなっている。更に、2000 年ではその傾向がより顕著に現れている。

4．2 活動項目別余暇活動時間量（図 3）

1975 年、1990 年、2000 年の経年的な比較を通して、活動項目別の余暇活動における年齢層別の傾向を以下に整理する。



1) スポーツ

男性の平日では、低年齢層及び高年齢層で時間量が多く、休日では時間量の分布にばらつきがみられ、その傾向は両地域共に同様である。

女性では、両地域、平日休日共に、2000 年までに時間量は減少する傾向を示すと共に、各年齢層別の時間分布は平均化しており、差異がみられなくなっている。

2) ショッピング

両地域、平日休日共に、1975 年においては、男性より女性の方が時間量が多く、特に中年年齢層で多くなっていたが、2000 年までに女性の何れの年齢層でも減少しており、時間量の分布においては、男性と女性の差異が少なくなっている。

両地域に共通して、何れの年齢層においても、近隣空間で対象となる活動項目は限定されてきており、買い物をする空間としての近隣空間の担う役割は低下してきていると考えられ、その傾向は女性において顕著に現れていると言えよう。

3) ゲーム

男性の平日では、両地域共に減少傾向がみられ、2000 年では何れの年齢層においても時間量が少なくなっている。休日では平日より時間量は多く、年齢層別の時間量の分布にばらつきがみられる。

女性では、両地域共に、1975 年及び 1990 年では、何れの年齢層においてもほとんど活動はみられなかったが、2000 年では、高島平地域の高年齢層（55 歳から 59 歳、65 歳以上）において活動が行われている。

4) 家族交流

男性の休日では、2000 年までに中年年齢層（30 歳から 49 歳）で増加しており、その傾向は高島平地域において顕著に現れている。

女性においては、1975 年及び 1990 年では、高島平地域の時間量が多くなっていたが、2000 年では両地域、平日休日共に減少しており、年齢層別の時間量の分布のばらつきは少なくなっている。

1975 年から 2000 年を経年的に比較すると、近隣空間の公園において行われる家族交流（家族との談話、子供の相手等）の 1 人 1 日当たりの平均時間量は、男性の休日において、高島平地域では 10 分、島田地域では 4 分増加している。近隣空間の公園は、男性の休日における家族交流の行われる空間として、時間消費型余暇活動に積極的に利用されるようになってきており、その傾向は高島平地域においてより浸透していると言えよう。

5) 交際

時間量は、総じて女性の方が多くなっており、高島平地域の女性において、平日休日に共通して、2000 年における 7 歳から 24 歳の増加が顕著であ

る。一方、男性では概して減少傾向が現れている。また、両地域を比較して、男性女性共に、年齢層別の時間量の分布にばらつきがみられ、各年齢層の活動に差異が現れている。

5. まとめ

本稿は、異なる地域の近隣空間における余暇活動の経年変化について、活動特性の側面から捉えたものである。以下にその傾向的特性を整理する。

1) 近隣空間における余暇活動について、時間的側面からみた主要な活動はスポーツ（散歩を含む）であり、総余暇活動時間量に対して男性では約 4 割、女性では約 3 割を占めている。次いで、男性ではゲーム、女性ではショッピングの時間量が多くなっている。また、近隣空間での総余暇活動時間量に対するスポーツ（散歩を含む）及びショッピングの占める割合は、1975 年から 2000 年までに、高島平地域では大きく減少し、島田地域では僅かに増加している。活動特性は地域の状況により異なり、高島平地域では島田地域と比較して、近隣空間において活動の分散化の浸透がみられると言えよう。

2) 1975 年から 2000 年までの経年変化より、近隣空間での主要な余暇活動は、日常生活と直接かつ密接に関係して行われる活動であり、その活動特性から近隣空間の担う役割は、高島平地域においてより多様化してきていると考えられる。

3) 余暇活動を年齢層別に捉えると、1975 年から 2000 年までに、両地域共に概して 24 歳以下では時間量の増加はみられず、50 歳以上の高年齢層で増加する傾向が現れており、近隣空間は高年齢層の活動空間として機能していると言えよう。

4) 近隣空間の公園は、休日の家族交流の行われる空間、時間消費型余暇活動の受け皿空間として、特に男性において積極的に利用される傾向が現れてきており、地方小都市より大都市圏である高島平地域においてその傾向が顕著にみられる。

本論文に関連する既発表論文

- 1) 川岸梅和、北野幸樹、他：建築・都市空間と余暇活動の相関に関する研究（その 1～その 14）、日本大学生産工学部学術講演会建築部会講演概要、第 25 回、pp.167～174、1992.12、第 26 回、pp.137～144、1993.12、第 27 回、pp.193～200、1994.12、第 28 回、pp.161～164、1995.12、第 29 回、pp.257～264、1996.12、第 33 回、pp.133～136、2000.12、第 34 回、pp.77～80、2001.12、第 35 回、pp.41～48、2002.12、第 36 回、pp.239～242、2003.12
- 2) 川岸梅和、北野幸樹：時間的・空間的側面から見た余暇活動の動向と特性について 近隣余暇関連施設に関する研究 その 1、日本建築学会計画系論文集 第 487 号、pp.167～176、1996.9
- 3) 川岸梅和、北野幸樹：近隣空間における余暇活動の動向と特性について 近隣余暇関連施設に関する研究 その 2、日本建築学会計画系論文集 第 498 号、pp.153～159、1997.8